実践のまとめ（小学校５年　道徳科）

授業公開日　令和７年９月24日第５校時
指導者　新発田市立猿橋小学校
教諭　加藤　聡史

１　研究テーマ

テーマ発問によって促す児童の多面的・多角的思考
～シンキングツールを活用した対話を通して～

２　研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

道徳科では、児童の道徳性を養うために物事を多面的・多角的に考える学習が求められている。永田（2017）の提唱するテーマ発問は、主題を掘り下げて児童の思考を深める発問として有効であると言われている。しかし、「何がどうなれば多面的・多角的思考なのか」という規準が明確に示されていない(1)。また、『学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』にも、「何がどうなれば多面的・多角的思考なのか」という規準は、明記されていない。この規準がなければ、児童は授業前後での思考の変容に気付きにくいと考える。テーマ発問に関する研究は、国立情報学研究所が運営するデータベース CiNii でも、５本の論文にとどまっている。

筆者は、「道徳的価値に関する一つの言葉」を規準としたテーマ発問を用いて授業を構成する研究を継続してきた。「道徳的価値に関する一つの言葉」とは、『学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』で示されている内容項目の概要、指導の要点をはじめ、教材や児童の実態を鑑みて設定する言葉である。「B　友情、信頼」ならば「友達」、「D　感動、畏敬の念」ならば「感動」などが考えられる。これまでの研究から、「仮定」をする多面的思考を促すことで、80%以上の児童に多角的思考も促すことができるなど、一定の成果を挙げることができた(2)。

一方、筆者と児童のやりとりによって授業が進み、児童間の対話の量や質を十分に確保できていないことに課題を感じていた。児童間の対話や児童自身の自己内対話を通して、自分や仲間の考えのよさに気付かせ、更に多面的・多角的思考を促したい。そのためにも、シンキングツールを活用して考えをまとめる場面を設ける。シンキングツールによって考えが可視化され、仲間との考えの共有や比較が容易になるなど、対話を深める効果が期待できる。

本研究では、「道徳的価値に関する一つの言葉」を用いたテーマ発問を行いつつ、児童がシンキングツールを活用して対話をする中で、多面的・多角的思考を引き出せるかを検証する。

(2) 研究テーマに迫るために

①　テーマ発問について

「道徳的価値に関する一つの言葉」を用いた３つのテーマ発問（Ａ・Ｂ・Ｃ）を行う。浅見（2018）は、「子どもたちがよりよい生き方をしていくためには、一つの事象に対して様々な見方で考えることができ、選択肢を多く持つこと、そして、その複数の選択肢の中から適切に判断していくことが重要である。」と述べている(3)。このことから、本研究では、３つのテーマ発問をＡ、Ｂ、Ｃの順で行うこととする。具体的には、表１に示す。

表１　本研究におけるテーマ発問の分類及びテーマ発問例

テーマ発問	概要	「道徳的価値に関する一つの言葉」が**「素直」**の場合
Ａ	道徳的価値に対するイメージを確認する発問。道徳的価値に対するイメージを学級全体で共有することで、道徳的価値に対して様々なイメージがあるという気付きを生む。	**「素直」**とは何か。

B	道徳的価値を様々な立場から分析することで、多面的思考を促す発問。テーマ発問A以外に、違う視点から考えることを促したり、揺さぶったりすることで、道徳的価値に対するイメージの広がりを生む。	主人公の**「素直」**は、みんなが納得できるものなのか。
C	道徳的価値を基にして、「自分だったら」と選択することで、多角的思考を促す発問。テーマ発問A・Bを踏まえ、自己決定し、その理由を交流することによって、道徳的価値に対するイメージの深まりを生む。	なぜ**「素直」**は大切だと言えるのか。

② 対話について

児童一人一人が自分の考えをシンキングツールにまとめる時間を確保する。シンキングツールの活用は手段であり、目的ではない。「考えを伝えて終わり」とならないように、対話の目的や方法を明確にし、ペアやグループ、全体での対話の時間を確保する。また、考えの変容に気付きやすくするため、「道徳的価値に対するイメージが授業前と授業後でどのように変わったのか」を振り返りに記述するよう促す。

(3) 研究テーマにかかわる評価

① 対象児の授業の様子や振り返りの記述から、テーマ発問の有効性を検証する。

② テーマ発問及びシンキングツールを活用した対話によって多面的思考及び多角的思考に至ったかどうかを、対象学級の児童全員の振り返りの記述から見取る。具体的には、表２の記述が見られたかを規準とする。

表２　本研究における多面的思考及び多角的思考の判断根拠となる記述

多面的思考をしたと分かる記述	多角的思考をしたと分かる記述
道徳的価値を外側から見つめている。 ・こういう場合もあると考えている。 ・他の人の見方を推測している。 ・新たな側面を見いだそうとしている。　など	**道徳的価値について自分を起点としている。** ・自分だったらどうかと考えている。 ・これからの自分を展望している。 ・自己を見つめ直し、内省している。　など

検証の精度を向上させるため、テキストマイニング(4)による解析も併せて行う。テキストマイニングにより、児童の振り返りの記述の傾向や相関関係を把握する。

３　単元と指導計画

(1) 主題名

相手を受け入れるには（B　相互理解、寛容）

(2) 教材名

「ブランコ乗りとピエロ」（新編 新しい道徳５　東京書籍）

(3) 主題設定の理由

① ねらいとする道徳的価値

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに謙虚な心をもち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重することが求められている。また、相手の意見を素直に聞き、なぜそのように考えるのかを相手の立場に立って考える態度を育てる必要がある。相手を受け入れる、つまり広い心をもつことで自分と異なる意見や立場を尊重し、違いを生かすことができてよりよいものが生まれるというよさがある。相手の過ちに対しても、自分にも同様のことがあるとして謙虚な心、広い心で受け止めるように指導することが肝要である。

② 教材と児童

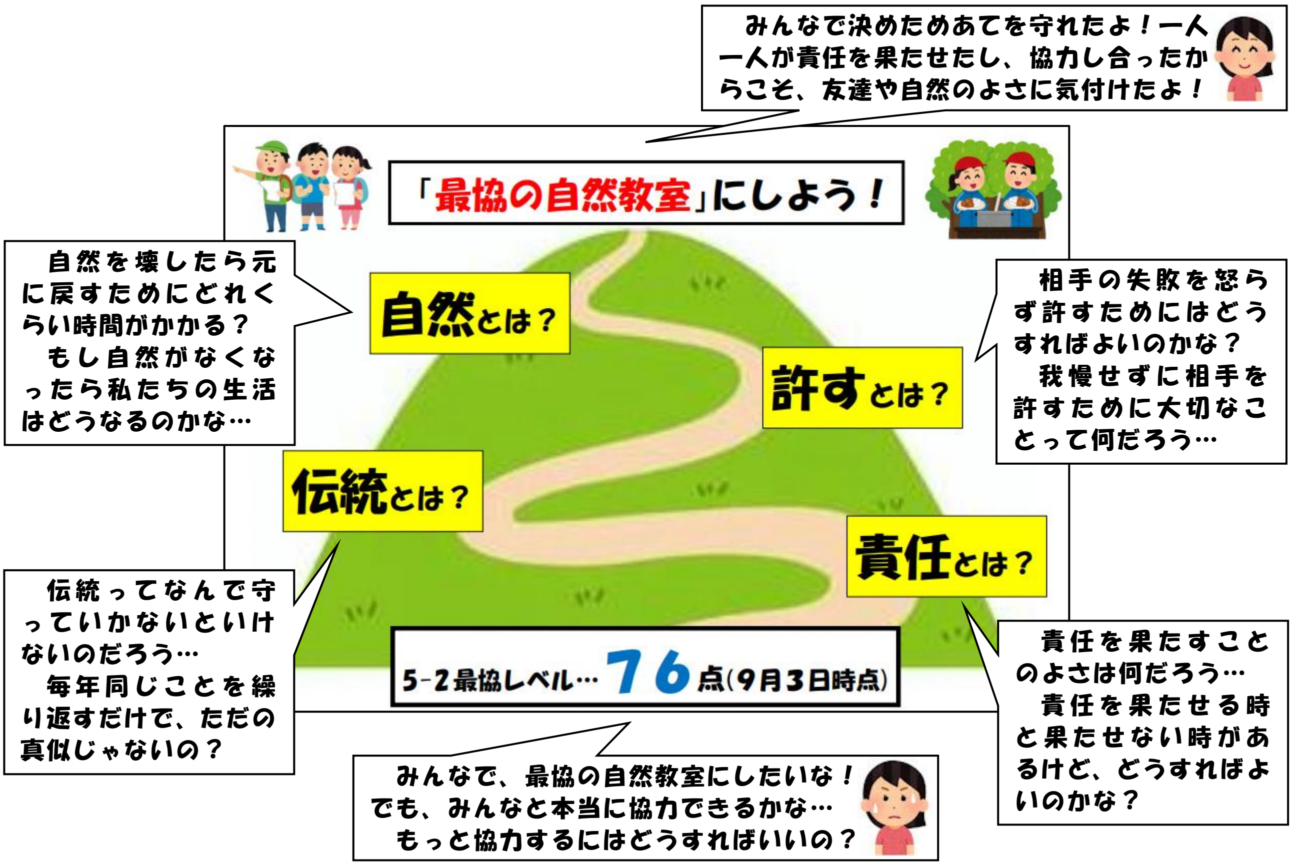
男女関係なく相手とかかわることができる児童が多い。その一方で、自分の思いを優先した言葉や考え方の違いによってトラブルが起こると、自ら謝ることができずにそのままにしたり諦めたりする児童がいる。「謝れば仲直り」という形式的なものではなく、「自分もそういうところがある」と相手の心情を推察したり、失敗を責めず、相手の思いに耳を傾けたりする力を育てていきたい。

本教材では、「自分勝手な振る舞いをするサムが許せない」と感じていたピエロが、観客のために一生懸命頑張るサムのよさに目を向け、「自分にも、自分勝手にやりたい気持ちがあった」と内省する。ピエロがサムの思いに寄り添おうとすることで、両者だけでなく周りのみんなが笑顔になったというものである。相手を責めるのではなく、「自分にもそういうところがある」と謙虚に考えたり、相手のよいところに目を向けつつ、相手に「よくなってほしい」という願いをもって接したりするよさに気付かせたい。なお、本時のテーマ発問は、「許す」に関連させるもので構成する。相手を受け入れるために、児童の「許す」に対する多面的・多角的思考を促したい。

児童が対話に必要感をもち、考えの変容に気付きやすくするために、シンキングツールを用いる[5]。児童は、これまでにクラゲチャートや座標軸、ベン図などのシンキングツールを用いて思考する学習に取り組んできている。本時では、「ピエロは、サムのことを本当に許したのか」という問いに対してシンキングツールを用いることで、ピエロの思いを様々な視点から想像することができると考える。児童自身が最も納得いく考えを見付けることができるよう、どのシンキングツールを使ってもよいこととする。また、自由に離席したり、自席に留まって一人で考えたりする時間を設けることとする。

(4) 単元の構想

学級目標は「最協５の２」である。最も協力する学級を目指し、様々な活動に取り組んできた。１０月に集団宿泊活動が予定されていたことから、「最協の自然教室にしたい」という思いを児童とともに確認し、内容項目の関連を意識しながら単元を構想した。「責任」「伝統」「許す」「自然」という「道徳的価値に関する一つの言葉」を用いた４つの授業を通して、協力するよさや大切さを改めて見つめ直す児童の姿を目指した。



４　本時の展開（本時３／４時間）

(1) ねらい

サムを受け入れたときのピエロの心情について話し合うことを通して、相手を許すために必要なことは我慢だけではないことに気付き、謙虚な心をもって相手と接しようとする態度を育てる。

(2) 展開の構想

①テーマ発問Ａ（「許す」に対するイメージを確認する発問）

「『許す』とは何か」と問い、ノートにイメージを記述する時間をとる。「優しさ」や「思いやり」、「相手を認める」など、相手に対する自分の思いや行動のイメージが表出されるであろう。そこで「相手を許す時とはどんな時か」と問い返し、「我慢」に関連した言葉を取り上げつつ、「我慢せずに相手を許すためには」という学習課題につなげる。

②テーマ発問Ｂ（「許す」に対する多面的思考を促す発問）

事前に教材を読んだ感想を児童がタブレットで提出したものを、学級全体で共有する。「ピエロはサムのことを許してすごい」や「ピエロは心が広い」など、主題に沿った感想を取り上げる。「自分だったらサムのことを許すか、許さないか」と問い、「そもそも、ピエロはサムのことを本当に『許した』のか」について考えをまとめるよう促す。シンキングツールによって考えを可視化し、「許す」に対する多面的思考を促す。シンキングツールに考えをまとめる時間を設定し、離席して仲間と考えを伝え合う時間を設ける。

③テーマ発問Ｃ（「許す」に対する多角的思考を促す発問）

テーマ発問Ｂに対する考えを全体で交流する時間を設ける。許した立場に対しては「なぜ、謝られてもいないのに許せるのか」、許していない立場に対しては「なぜ、サムのことを助けるようなことを周りの団員に言ったのか」と問い返し、ピエロのサムへの思いを焦点化する。その上で「相手を『許す』上で大切なことは何か」と問い、多角的思考を促す。ピエロは、サムが今後よくなることを期待したことや、ピエロ自身も失敗することがあることに関連した言葉を取り上げ、現在の気持ちにとらわれすぎず、相手の未来に目を向けたり「おたがいさま」という謙虚な気持ちをもったりする大切さに気付かせたい。

(3) 本時の展開

学習活動	授業者の働き掛けと予想される児童の反応	手立て・支援・留意点
つかむ５分	Ｔ１　「許す」と聞いて、どんなことを思い浮かべますか。 Ｃ　優しさや思いやり。 Ｃ　相手の失敗を認めること。 Ｃ　謝られたら許すけれど、謝られなければ許さない。 Ｔ２　謝られなければ、相手を許すことはできませんか。 Ｃ　我慢したくないけれど、我慢すればいい。 Ｃ　我慢するだけだと、自分ばかり嫌な気持ちになる。 課題　がまんせずに、相手を許すためには？	・「許す」に対するイメージをノートに記述し、全体で確認する時間を設ける。 ・児童がイメージを発表する中で「どんな時に許すか(許さないか)」を問う。 ・許すとは、我慢するだけではなさそうだということを確認する。
考えをもつ10分	Ｔ３　『ブランコ乗りとピエロ』の感想を発表しましょう。 Ｃ　ピエロとサムが仲直りできてよかった。それがみんなにも広がった。やっぱり、許すって大事だな。 Ｃ　ピエロは我慢したのかもしれないけれど優しいな。 Ｃ　謝られていないのに、ピエロは、サムをなぜ許したのかな。 Ｔ４　あなただったら、サムのことを許しますか。 Ｃ　許さない。謝っていないし、自分勝手なことをしてみんなに迷惑を掛けているから。 Ｃ　許す。みんなに無視されてかわいそうだし、サムは反省して、よくなっていきそうだから。	・児童は教材を読んだ感想をタブレットで提出しておく。ピエロ視点の感想をもった児童を指名する。 ・ピエロとサム、団員の関係を板書でまとめる。 ・「自分だったらサムを許すか」と問う。挙手で立場を示させ、理由を問う。「分からない」も可とするが、その理由を問う。

学び合う20分	Ｔ５　ピエロは、サムのことを本当に許したのでしょうか。 Ｃ　許していない。ピエロは、大王アキレスに演技を見てもらえなかったわけだし、次に見てもらえるまでに１年も待たないといけないから。 Ｃ　許していない。ずっともやもやした関係でいるのが嫌で表面的に許しただけで本当は違うと思うから。 Ｃ　許していない。やっぱり謝られてもいないし、ピエロはサムのことをまだ信じていないと思うから。 Ｃ　許した。悔しい気持ちはあるけれど「楽しませたい」という気持ちはピエロもサムも同じだから。 Ｃ　許した。サムのよくないところばかりに目を向けていたことを反省して、ピエロはよいところに目を向けるようになって周りの団員も明るくなったから。 Ｃ　許した。「自分さえ」という気持ちが自分にもあることに気付いたわけだし、ピエロはサムと似ているところに気付けたから。 Ｔ６　相手を許す上で大切なことは何でしょう。 Ｃ　相手がよくなることを期待したり信用したりする。 Ｃ　自分も失敗することがあると考える。 Ｃ　気持ちを確認して、一緒に協力しようとする。	・問いに対する自分の立場を決定し、赤白帽子を被るよう促す。（赤：許した　白：許していない） ・シンキングツール（タブレット）を用いて、「許した」「許していない」のどちらかを選択し、その理由を各自でまとめる時間を設ける。 ・離席して対話することを許可するが、席に留まって一人で考えてもよいと伝える。対話の手段が決められない児童には、授業者が個別に声を掛ける。 ・「許した」「許していない」という二つの考えの理由を共有しつつ、それぞれの立場の児童に問い返し、多面的思考を促す。
振り返る10分	Ｔ７　我慢せずに相手を許すことはできそうですか。これまでの自分とこれからの自分について振り返りを書きましょう。 Ｃ　よくないところばかりを責めても仕方がないし、自分と相手だけではなく、周りも嫌な気持ちにさせてしまう。友達とけんかをした時に、周りの友達が心配して声を掛けてくれたことがあった。友達とけんかをした時には、相手のよいところにも目を向けて、協力してもっと仲良くなりたい。 Ｃ　今は我慢してしまうかもしれないけれど、相手にもっとよくなってほしいという願いを込めて許すのが大切なんじゃないかなと思う。もし、友達が嫌なことを言ってきた時は、もちろん謝ってほしいけれど、これからのことを考えて、「何かあったの？」と聞いて優しい気持ちでかかわるようにしたい。	・相手の失敗を許す上で大切なことを問い、板書にまとめる。 ・これまでに、自分の失敗を相手が許してくれた場面を想起し、相手がどんな思いをもっていたのかを想像するよう促す。 ・授業の初めの「許す」に対するイメージの板書を強調し、そのイメージがどのように変容したのかを振り返りに記述するよう促す。

(4) 評価

①　評価の視点

「許す」に対する授業前後の考えの変容を振り返りに表している。

②　評価の方法

・対象児の授業の様子を録画し、テーマ発問に対する反応を検証する。

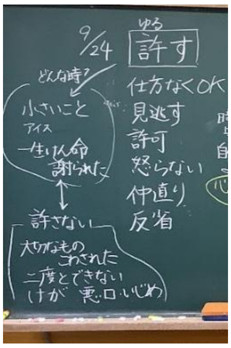
・児童全員の振り返りの記述から、「許す」に対して多面的・多角的思考をしたと思われるものを見取る。テキストマイニングによる解析も行い、客観的データも踏まえる。

5　成果と課題

(1) 授業の実際

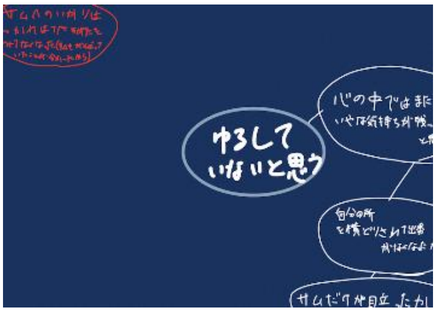
①　<u>テーマ発問Ａ（「許す」に対するイメージを確認する発問）</u>

<u>「許すとは何でしょう」</u>と問うた。すると、「怒らない」という心情的なものや「仲直り」という行動的なもの、「相手が反省していれば…」という対象を意識したものが出された。「仕方なく」という仲間の発言に反応したＡ児は「見逃す」と発言した。この時点では、二つの言葉から、「仕方なく許してあげる」というように、「許す」という行為に対して消極的な様子がうかがえた。



② テーマ発問Ｂ（「許す」に対する多面的思考を促す発問）

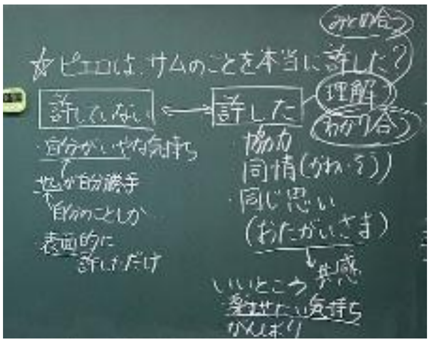
「ピエロは、サムのことを本当に許したのか」と問うた。シンキングツールで自分の考えをまとめるよう促した。Ａ児は、「許していない」と考え、ウェビングによって「嫌な気持ちが残っていると思うから」や「自分も目立ちたいのに出番を横取りされたから」と理由をまとめていた。その後、離席して交流してもよいこと、付け足したくなったら自分の考えと色を変えて付け足すことを全体に伝えると、Ａ児は４名と対話し、資料１のようにまとめていた。赤字で示した部分は、Ａ児が対話によって新しく気付いたものである。特に、「許した」という仲間の考えに共感して「サムも頑張っていたことに気付けたから」と自分のウェビングに付け足していた。



資料１ Ａ児のウェビング

③ テーマ発問Ｃ（「許す」に対する多角的思考を促す発問）

ロイロノートの提出箱に各自のシンキングツールを提出するよう促し、他の児童のシンキングツールを見ることができる状態にした。「許した」「許していない」それぞれの考えで納得した理由を問う中で、「許した」の理由として「同じ気持ちだと気付けば、相手の思いに共感できるのではないか」というものが挙げられた。「それについてどう思うか」とＡ児に問うと、「同じ気持ちで同じ思いをもっていれば、お互いに分かり合えそう」と答えた。そこで、「『自分だけがスター、目立ちたい』以外に同じ思いはなかったのかと問い、「サーカスを成功させたい」という思いがあったことを全体で確認した。その上で、「謝られなくても相手を許すために大切なことは何か」と問うと、Ａ児は「相手の気持ちをちゃんと分かろうとする」と答えた。他にも、「分かり合う」や「認め合う」などが出された。事前に読んだ感想の中で「ピエロは、サムのよさに気付いてすごい」というものがあったことを紹介し、「サムのよさとは何か」と問うた。すると、「楽しませよう」「盛り上げたい」という気持ちだけでなく、「頑張り」という行動も出された。相手のよくないところばかりに目を向けるのではなく、いいところを見ようとしたり、自分も失敗することがあるという「おたがいさま」の気持ちをもったりするよさなどの気付きを生むことができた。



（2）成果

テーマ発問によるＡ児の思考の変容は、表３のとおりである。

表３ 「許す」に対するＡ児の思考の変容

テーマ発問	Ａ児の思考
Ａ「許すとは何か」	許すとは、見逃すことだ。
Ｂ「ピエロは、サムのことを本当に許したのか」	嫌な気持ちが残るし、許したくない。でも相手の頑張りに気付けば許せることがあるのかもしれない。同じ思いをもっていることに気付けば、分かり合えるかもしれない。
Ｃ「相手を許すために大切なことは何か」	許すには、相手の気持ちをちゃんと分かろうとすることが大切だ。

このように、「許すとは、見逃すことだ」と捉えていたＡ児は、表３のように思考を変容させていた。テーマ発問Ｂにより、「嫌な気持ちが残るから許せない」という自分の考えを強化させつつ、「相手の頑張りに気付けると許せることがあるかもしれない」「同じ思いをもっていることに気付けば、分かり合えるかもしれない」という新たな視点を得ていた。また、テーマ発問Ｃにより、自分の気持ちばかりを優先させず、相手の気持ちに寄り添おうと

することが大切だと自己決定していた。A児の振り返りの記述は、資料２のとおりである。

今までは、許すか許さないかは、相手の行動で決めていた。でも、この授業を通して相手の気持ちをちゃんと分かろうとすることが大切だと分かった。悪いことをしても、相手はふざけた以外にも理由があるかもしれないと感じた。だから、これからは、相手が悪いことをしたとしても、相手を責める前に、理由を聞いたりしてくわしいことを知るということを心がけていきたい。

資料２　A児の振り返り（下線は多面的思考、網掛は多角的思考と分かる記述）

テーマ発問Bでの対話によって、多面的思考をしていた様子がうかがえたが、振り返りでは、「相手の行動には何か理由があるのかもしれない」と推察しようとする新たな一面が生まれていた。テーマ発問Cでは、「相手の気持ちをちゃんと分かろうとすることが大切だ」と考え、相手の行動だけで判断せず、その行動に至った理由を確認するなど、広い心をもって相手と接する大切さに気付き、資料３のような多角的思考に至ったと考える。

学級全体では、30名中27名(約90%)が「許す」に対して多面的思考をし、26名(約87%)が多角的思考、25名(約83%)が多面的思考かつ多角的思考をしたことが分かる記述であった。具体的には、表４のとおりである。

表４　本時における多面的思考及び多角的思考をしたことが分かる記述

多面的思考をしたと分かる記述（一部抜粋）	多角的思考をしたと分かる記述（一部抜粋）
・同じ思いがあるからお互いに許せる。 ・「認め合う」と「許す」は深い関係がある。 ・簡単に許せば、また悪いことをするかも。 ・許すことはそんなに簡単なことではない。 ・違う視点から見れば、素直に謝ったり反省して直そうとしたりすることができる。	・よいところを見て、心が広い人になりたい。 ・相手との共通点を見付けて共感したい。 ・自分が正しいと決め付けず、自分の考え方を見直すことが大切。 ・相手の立場や考えを理解した上で、自分の考えを伝えることが大切。

このように、相手の気持ちを確認したり、違う視点から相手を見ようとしたり、自分を省みたりする大切さに気付くなど、児童一人一人が「許す」に対するイメージを深めていた。

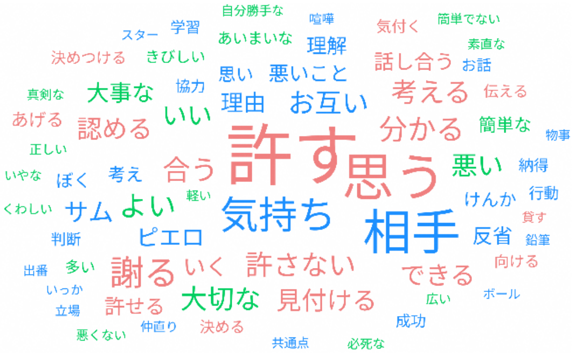


図１　振り返りの記述のワードクラウド

図１は、テキストマイニングによる児童の振り返りの記述のワードクラウドである。「許す」という言葉を振り返りで記述するよう指定をしなかったが、最も頻出した言葉となっていた。また、「許す」と共起回数が多く見られた言葉のうち、授業者が用いた言葉以外では、「おたがい（８回）」「悪い（８回）」「見付ける（６回）」「簡単（４回）」という順となった。テーマ発問Aでの児童の反応にはなかった言葉であり、テーマ発問B・Cによって「許す」について多様な感じ方や考え方を促すことができたと考える。「相手の悪いところ（短所）ばかりに目を向けず、よいところ（長所）を見付ける」という大切さに気付きつつ、それは「簡単なことではない」という人間理解にもつながっていたことがうかがえた。

本単元では、「責任」及び「伝統」をテーマに授業する中で、「ちょっとくらい」や「みんながやっているから」という「人間の弱さ」も取り上げながら、児童の思考の深まりを目指した。すると、本時では「謝られなくても、こういうことは自分にもあるよなと考えるようにしたい」という人間理解を踏まえた思考をした児童がいた。また次時の「自然」をテーマにした授業においても、「自然は大切だと分かっていながら、心の弱さのせいで大切にできていなかった自分に気付けた」という振り返りの記述があった。

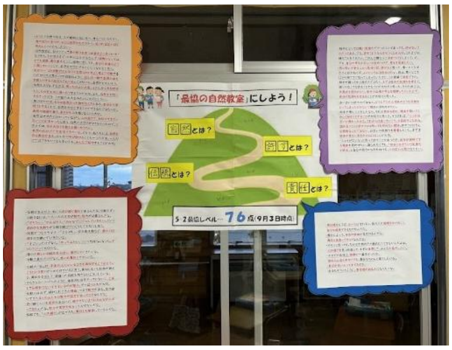
自然教室後の振り返りでは、協力のよさや大切さを感じつつ、「責任」や「許す」など、道徳での学びをつなげながら児童は記述していた。単元の構想を工夫する大切さを学んだ。

（3）課題

正しいと分かっていながら、なかなか実現することができないという「人間の弱さ」は誰にでもある。本時では、「サーカスを成功させたい」という思いをもちつつ、自分勝手な行動をしたサムの心情のみを「人間の弱さ」として位置付けた。しかし、「自分も目立ちたかった、引きずりおろしたいほど悔しかった」というピエロの「人間の弱さ」も取り上げるべきであった。そうすることで、お互いがもつ「人間の弱さ」を踏まえ、「お互い様だからこそ自分も広い心をもちたい」という思いをもつことが児童にとって容易になったと思う。また、相手の気持ちを推し量ろうとするだけでは、失敗した相手に対して「上から目線」となりかねない。ピエロのように自分の心の弱さを自覚し、それを相手に伝えた上で相手の思いを確認しようとすることによって、相手と更に分かり合うことができ、謙虚に生きることの大切さにも気付きやすくなると感じた。また、本時では、ピエロのように「相手を許す側」で思考するよう促したが、「今まで自分が許してもらった時はどんな時だったか」というサムの視点を含んだ補助発問を行うことで、様々な立場から「許す」について多面的・多角的に思考することができたと考える。様々な立場からの思考を促すことで、児童を混乱させることもあるが、児童の思考の流れを意識したテーマ発問ならば可能であると考える。

道徳科の教材は、起承転結の「転」で終わっているか「結」で終わっているかがほとんどである。「転」で終わっている場合は思考のズレを生みやすいが、『ブランコ乗りとピエロ』は「結」で終わっている。本時は、事前に教材文を読ませており、結果が分かっていた状態であったため、児童の考えの理由が教材文に依拠したものとなりがちであった。本時の場合、『ブランコ乗りとピエロ』の「転（ピエロがサムのよさを団員に伝える場面）」までを事前に読ませておき、授業で対話した後に「結（ピエロとサムが互いに分かり合い、サーカスが成功で終わる場面）」を提示するという展開でもよかった。「転」と「結」を踏まえ、児童がどんなことを思考し、どんなことを対話したくなるかを想定する必要がある。

単元の構想を振り返ると、「責任」と「伝統」をテーマに既に学習しているという積み重ねを生かすことができなかったと感じた。この二つと「許す」を関連させた場合、「自分の言動に責任をもつことは、自分の言動を省みることにつながり、すぐに怒らず広い心をもって相手を許せること」や「伝統を受け継ぐには、前向きな思いが必要だったように、前向きに相手を許そうとすることで、相手ともっと分かり合えること」といった思考を促すことができたのではないかと考える。「単発」という言葉をよく耳にする道徳科をアップデートし、国語科や算数科のように「これまでの学びの積み重ねを意識できる道徳科」となるよう、今後もテーマ発問を追究しつつ、単元の構想についても研究を進めていきたい。



＜参考文献＞
(1)永田繁雄.『これからの道徳教育で特に求められること－道徳教育の改善と充実－』.2017.p.5.
(2)加藤聡史.『テーマ発問によって促す児童の多面的・多角的思考』.新潟教育会.2020.p.76-83.
(3)浅見哲也.『多面的・多角的に考える道徳科の授業とは』.明治図書.2018.725,p.68-70.
(4)株式会社ユーザーローカル.『AI テキストマイニングツール』.2020.
https://textmining.userlocal.jp/
(5)株式会社 LoiLo.『ロイロノート・スクール』.2020. https://n.loilo.tv/ja/
(6)東京書籍『ブランコ乗りとピエロ』.東京書籍株式会社.2024.p.120-125.
(7)文部科学省.『学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』.東洋館出版社.2017.p.48-49.